

訪問日：2017.9.1 / エリア：京都

## 京都国立近代美術館 「感覚をひらく」 —新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業—

回答者 松山 沙樹さん(京都国立近代美術館学芸課特定研究員)



### 新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業 立ち上げの経緯

今年がプログラムの初年度で、今年度は文化庁の「平成 29 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を得て実施しています。京都を中心に活動する市民団体ミュージアム・アクセス・ビューが、見えない・見えにくい人と見える人が、共に言葉で作品鑑賞をする活動を 15 年程続けておられ、当館では毎年この活動を受け入れてきたという背景がありました。こうしたことなどを踏まえて、今年度からは美術館がより主体的に地域全体に対して取り組むプロジェクトとして「感覚をひらく—新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」を立ち上げました。

本事業は、視覚だけに頼らず様々な方法で「美術館」を体験する試みを積み重ねながら、美術館での過ごし方や作品鑑賞の新しいかたちを模索していくことを目指しています。実施中核館は当館ですが、地域の盲学校や大学とも連携し、相談しながら進めています。助成は単年度のものになりますが、今後 3 年程重点的に取組を積み重ねていきたいと考えています。

### 障害のある・なしに関わらず地域に ひらかれた美術館に向けて

このプロジェクトが始まった経緯には、2020年のオリンピック・パラリンピックに向けた機運の高まりや、障害者差別解消法の施行で合理的配慮を求める社会の流れに応じたいという思いもありました。しかし、私たちが最も重視していることは、障害の有無に関わらず、美術館に来たことがない人や、そもそも美術館の存在を知らない人に向けて、「こんな楽しみ方もできるんだ」と、美術館利用の可能性を開いていくことです。

障害のある・なしや年齢に関わらず、美術館という場で相互に交流してもらおうという意味では、美術館がコミュニティを作って

いく場としてどのような役割を果たすことができるのかを考えていく「実験」でもあると感じています。

誰もが美術館で気持ちよく過ごせるようにするために、バリアを取り除く配慮（バリアフリー）は重要です。館内での案内を充実させたり、点字・拡大文字による「美術館パンフレット」を作成したりと、ハード面の整備にも可能な限り力を入れています。

とりわけ、今年度作成している「美術館パンフレット」は、美術館のコレクションや建築、周辺の岡崎地域のことにも興味を持ってもらえるような内容です。平成 29 年度中の完成を予定していて、全国の盲学校やライトハウス、点字図書館、また希望者のお手元にお届けして、ひとりでも多くの方に「京都国立近代美術館に行ってみよう」と思ってもらえるような「招待状」になることを期待しています。また、当館を拠点として、この地域では勸業博覧会が開催されたというような歴史に思いを馳せたり、他の施設にも出かけて行けたりするような、ハブとしての役割を果たせればと思っています。

「美術館パンフレット」とともに制作を進めているのが、視覚に障害のある方が、当館の所蔵品を触って楽しむことができるツール「さわるコレクション」です。「触図」とも呼ばれるもので、点や線で作品の輪郭を表したのですが、実際に何人かの視覚に障害のある方に触っていただいて意見を聴きながら、ときには元の作品の輪郭や形をデフォルメしたり、省略したりと工夫を加えながら作成しています。こちらも今年度中の完成を目指しています。

「美術館パンフレット」は、まずはご自宅や学校で触って楽しんでいただきたいですが、やはり美術館という空間で、本物の作品を前にして初めてできること・感じられることの魅力も感じてもらえればと思っています。このことは、視覚に障害のある方だけに限ったことではなく、パソコンや図録で精彩な画像を見ることができる現代において、美術館が考えるべき課題でもなと思っています。

「みる」ことを中心としてきた美術館での体験を問い直し、障害の有無を超えて、誰もが美術館を訪れ、経験できるプログラムを創造・構築する事業。美術館と鑑賞者が協働し、美術鑑賞の新たな可能性を探る試みを実施している。

〒606-8344  
京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1  
TEL: 075-761-4111(代表)

## 実施に当たっての課題

広報、つまりこの活動をどんな方法で周知するかということについては常に意識しています。平成29年度は2種類の点字入りチラシを作りましたが、見える人に向けた媒体では視覚的なインパクトを重視して、強調したい内容は文字を大きくしたり目立つ場所に配置したりする傾向が強いのに対して、点字を読まれる方にとっては、重要な情報は上の方に書かれる方が好ましいといった違いがあることを学びました。また1枚の中に点字で掲載できる情報量には限りがあり、目が見える人にも、見えない人にも分かりやすい広報物とはどのようなものなのかと、頭を悩ませることもありました。さらに、点字が読める人は視覚障害者の1割程度と言われていています。つまり、点字を読めない目が見えない人にどうやって情報を届けるのかということも同時に考えていく必要があるということです。

また、先進事例を学びに他の美術館や博物館等へ行って初めて、触る図録や障害者向けプログラムを用意されている施設が存在することが分かってきました。こうした取組はおそらく各地で進んでいるものの、全体的に俯瞰して知ることができる機会や場がまだまだ少ないのが現状だと思います。こうした取組について、ミュージアム同士が情報交換をしたり、企画の連携や問題意識の共有を行える場を増やしていくことも、今後は大切になってくるだろうと考えています。